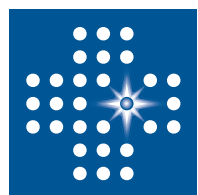


季刊

ベストドクターズ® インジャパン

Issue 28 2015



Best Doctors®



今月のベストドクター

北海道大学病院長

北海道大学副理事

寶金 清博 先生

脳外科医、教育者、病院長として 学び、伝え、極める日々

脳血管障害、もやもや病の外科治療の第一人者として脳神経外科の最先端をいく寶金清博教授。2013年には北海道大学病院長に就任し、経営者としての手腕も振るう。寶金教授に、脳外科医、教育者、病院長としての多忙な日々を伺った。



北海道大学病院長 北海道大学副理事
北海道大学大学院医学研究科脳神経外科学分野 教授
寶金 清博 ほうきん・きよひろ

1979年北海道大学医学部卒業。86～89年米国カリフォルニア大学デービス校客員研究員。北海道大学脳神経外科講師、同助教授を務める。その間、96年米国スタンフォード大学、英国王立神経研究所に留学。2001年札幌医科大学脳神経外科教授、06年同大学附属病院副院長（医療安全担当）。10年北海道大学大学院医学研究科脳神経外科学分野教授、同大学病院副院長。13年より現職。脳卒中の外科治療、脳血行再建術、もやもや病の外科治療では、日本有数の実績を誇る。

国際化実現への確実なステップ 極東ロシア・東アジアとの連携を目指す

「先日、団長としてロシア極東3地域に行ってきたばかりです」

ロシア極東地域の医療機関等との連携促進を目的として、2014年10月19日から25日の日程で、寶金教授は、北海道大学病院国際医療部、経済産業省北海道経済産業局、北海道、北海道銀行などから組織された代表団を率い、ウラジオストク、ハバロフスクおよびユジノサハリンスクを訪ねた。ハバロフスク地方腫瘍

センター、極東連邦大学メディカルセンター、国立極東総合医科大学に赴き、人材や研究等、幅広く国際的な学術交流を行うことが確認され、将来的には、現地で治療が難しい患者を北海道大学病院が受け入れる体制を整えていく。

副院長の任を経て、2013年、寶金教授が北海道大学病院の院長就任にあたり、打ち出した基本方針の一つが国際化であった。すでに言い古された感もある「国際化」だが、各地の大学病院をみても、内実を伴う成果を挙げているところは数少ないという。地域における診療の拠点としての役割を重視すれば、自ずと地域

密着型の体制が強化、優先されるのもうなずける。しかし、實金教授は、敢えて、国際化に積極的に取り組む。「富裕層が観光と健康診断を目的に来日するメディカルツーリズムでは、真の医療の国際化とはいえない。日本に暮らす外国人の患者さんに適切な診療を行うと同時に、日本だからこそ受けることのできる医療を求めて、海外から患者さんがやってくる、それを実践しなければなりません」

外国人の教員の割合を増やす、看護レベルを上げるなど打つべき対策は目白押しだが、国際医療部を創設し、病院のホームページは中国語、韓国語、ロシア語版を設け、日本語、英語を含めて5カ国語で情報発信をするなど、打てる手は打つ。現在、1%に満たない外国人患者の割合をどれだけ伸ばすことができるかが課題だ。直近の目標としては、まず、2桁台にのせたいという。

その尖兵ともいえる存在が2014年3月から治療を開始している陽子線治療センターである。原理から施

設設計まで、すべてが画期的な北大オリジナルともいえる。これまでは膨大な敷地が必要だった陽子線治療施設のコンパクト化に成功し、病院敷地内に併設された。患者が漠然ともってしまいう威圧感が軽減され、先進医療への親しみやすさが増した。そうしたイメージの向上だけでなく、治療効果も確かだ。動体追跡照射技術とスポットスキャン陽子線治療装置によって、呼吸や腸の蠕動によって位置を変える腫瘍に同期させて行う照射が可能になった。正常細胞を避け、よりピンポイントに腫瘍細胞だけを狙い撃ちできる。文



(上)(下) 手術室の外の血管造影室にて。脳動脈瘤の血管内治療のモニターを見詰めながら、「トンボの頭のような部位から、4本の羽のように4本の血管が走っています」と、医学生に対して脳血管の特徴と治療法について、分かりやすく印象に残る説明をする實金教授。

2014年に完成した、陽子線治療センターの回転ガントリーの前で。病巣の微妙な動きを正確に追跡する動体追跡技術と、陽子線治療を組み合わせた治療装置を世界で初めて設置。患者さんは寝台に寝たまま最適な方向から陽子線治療を受けることができる。



字通りの、先進医療である。ロシア極東3地域への訪問に際しても、陽子線治療センターは大きな魅力として、注目を集めたという。

實金教授の専門である脳神経外科の分野では、もやもや病に関する情報を網羅するホームページを立ち上げるなど、海外に向け、施設の特徴を打ち出している。

財政基盤の安定化を進め、 先進医療を担う人材を育成

国際化とともに、實金教授が院長としての自らの責務とするのは、安定した病院経営であり、高度な先進医療と丁寧な日常診療を提供する医師の育成である。

北海道大学病院で働く人々は約3000人。院長は、「経営者」としてその生活を負っている。医師・實金教授のもう一つの顔だ。患者たちに適正な診療を提供しつつ、財政基盤を安定化するのも重要なミッションである。国際化についても、公的な使命を果たすのはもちろんだが、単なるボランティアに終わってはいけない。ビジネスとしていかに成立させるか。現行の医療保険



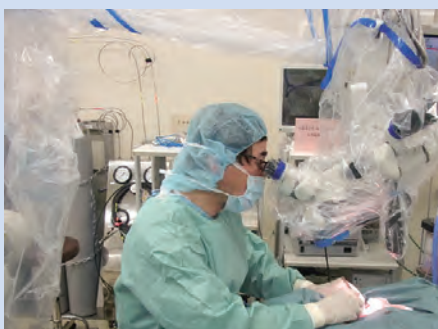
従来、サッカー場ほどのサイズだった陽子線治療の施設だが、特殊技術で小型化に成功し、北海道大学構内に設置。

制度との整合性を保ちながら、リーズナブルな費用体系を確立する新たな制度設計が求められている。

さらに大学病院である以上、臨床医の研修・育成も大きな務めとなる。公務で多忙を極めるなか、大学での医学生への講義とともに、研修医の教育に熱が入る。教育者としての顔も欠かせない一面だ。ゼネラリストであると同時にスペシャリストであらんとする医師をいかに育てるか。自らの背中を見せ、まねることから始める教育を重視する。「自分の師匠、メンターと出会ったら、とことんまねる。一挙手一投足、食べる物



(上)手術場にて。かつては40時間を超える手術の後、外来で診察したこともあったという。病院長になった今でも、月に2、3回は手術を行う。「寶金先生に診てもらいたい」と、海外からも患者さんが来院。
(下) マイクロサージャリーでの脳血管再建術の様子。「0.5ミリまでの血管ならつなげます。人間の手による手術の方が、ロボット手術より繊細」と寶金先生。



ドイツで行った手術の写真。世界各国で手術を行ってきた寶金先生は現在、北海道大学の医療の国際化を目指している。

からしぐさまで、徹底してまねてみる。結構、大事なことで、有効だと思っています」

さらに、そうした人材たちが、広い視野で基礎研究を究め、いち早く臨床につなげていくための橋渡し研究（translational research）で成果を出すことが待たれる。「アウトカムを出すのが使命」であり、そのバックアップのために、2014年10月には、高度先進医療支援センターと探索医療教育研究センターを組織統合し、臨床研究開発センターを発足させた。盤石の備えに余念がない。

自らが率いる脳神経外科の教室でも、脳梗塞の再生医療の分野で、骨髄細胞を用いた神経再生の臨床応用の研究が進んでいる。

世界一を目指して 「学ぶ、伝える、極める」

寶金教授の脳神経外科教室は、「学ぶ、伝える、極める」をテーマとして掲げる。教授就任に際して、寶

金教授自身が定めたものだ。「動詞＝アクションで示したほうがわかりやすいと思って」と、軽快な口調で思いを率直に語る。「大学ですから、当然自ら学ばなければいけない。そして、教育機関として技術と知識を伝え合わねばならない。さらに、より高みを目指す志をもって、教室のみんなには世界一を常に念頭に置いてほしい」

教授就任にあたって、もう一つ寶金教授が手がけたのが、教室のロゴマークだ。この顛末については、教室のホームページに「当科のロゴマーク～ロゴマーク誕生秘話」としてつづられている。そこに垣間見えるのは、寶金教授のフットワークの軽さである。患者を診察し、手術場に立ち、さらには後進の教育にあたる。その一方で、柔軟で、縦横無尽な想像力・創造性を発



(左) 教室での執務風景。
(右) 秘書スタッフと。3000人が働く北海道大学病院を歩きながら、さまざまなスタッフと打ち合わせ。資金先生の温和で誠実な人柄が、行く先々で笑顔の輪をつくっていく。

揮する資金教授。そのスケール感が、実際には教授より何歳も若いであろう教室員を驚かせるようだ。「教室員それぞれからデザインを募集する」といった手法に始まり、ときに教授のアグレッシブさに戸惑い、遅れをとるまいと走り回る教室員の姿、最終的にプロのデザイナーのアイデア、コンセプトに行きつくまでのストーリーは、興味深い。細部をおろそかにしない資金教授のこだわりが、「ロゴマークプロジェクト」を遂行するまでの一遍の成功譚のようで、教室の結束の固さや信頼関係をほうふつとさせる。

小人閑居して不善をなす。 多忙な仕事に就きたかった

医師になったいきさつを問うと、「敢えていえば」として、資金教授は少年時代を振り返った。小学校の幼なじみの同級生の父親が、当時、その領域では一流の医師であったという。その父親がずいぶんと資金少年をかわいがってくれ、折に触れて、医師の仕事のあれこれを面白おかしく話してくれたという。利発で、当時から成績がよかった資金少年は、格好の話し相手だったのかもしれない。「その時の話がとても興味深く、医師という仕事はよい仕事」という印象をもった。

高校入学時には、東京での文系への進学を目指していたが、医学部進学へと方向を変えたのも、こうした偶然に周囲にいた優れた医療の先人が大きな影響を与えた。「地元に残り、こうした先人の後継になりたい」

といった選択肢を選んだ。「医師でないにしても、何かしら忙しい仕事に就きたいと思っていました。『小人閑居して不善をなす』と言いますよね。外的要因に迫られなければ、

弱さや怠慢から、ついついさぼってしまう、そんな気がします。次から次へと行うことがある、僕にはこれが合っているのだと思います。ワーカホリックと家人からはひんしゅくを買っていますが……」

数多くの患者さんとの出会いが 医師を本物の医療者に育てる

資金教授が、手術に対するプロとしての心得を学んだ恩師と断言するのが上山博康（脳疾患研究所上山博康 脳神経外科塾総帥）先生だ。「精魂込めて患者の手術に当たる」ことの神髄を教わった。「患者にとって“まあいいか”はないが上山先生の口癖です」と資金教授は語り、60歳を過ぎた今でも手術にこだわり続けている。

そして、アメリカでの恩師が脳神経学者の中田力先生（米国カリフォルニア大学・デービス校教授）。「まさに“知の巨人”。最初会った時に量子力学の法則を滔々と述べられ、これを分らずして医者になるつもりか……と。その博学さに自信喪失。いつ日本に帰ろうかと毎日悩んでいました。しかし、とどまったおかげで科学とは何か、そして研究者としての真摯な態度を学ぶことができました」

さらに、人間との付き合い方や後輩の育て方、リーダーとしてのお手本となったのは、阿部弘先生（北海道大学脳神経外科第二代教授）だった。「リーダーは陣頭指揮。先頭を切るべし、と教えられました」

三者三様の師匠に出会い、得たものを自らの糧にし、バランスの妙ともいえる寶金教授の今がある。

そんな寶金教授の心に今も残る最初の患者さんの記憶。忘れられない患者さんは幾人もいるが、やはり極めて強烈な印象があるという。「悪性の脳腫瘍の方で、どうぞ自分を練習台にして、よいお医者さんになってくださいと言われました」。そうした献身的な患者さんたちによって医師は段々と医師になっていくという。

「数多くの患者さんと出会うことで、医師は育っていく。患者さんを診て、どれだけの影響を受けるか。それによって変われる者だけが、本物の医療者に近づいていく」

人が人を診る。最古の職業の一つである医師。医療崩壊やガラパゴス化など医療をめぐる危機的状況が指

摘されるが、「医師という職業は決してなくなることではない。だからこそ、自浄作用や謙虚さが大切」と寶金教授はいう。日本学術会議の会員として、医師という職業人のモラルに対する提言も行う。2015年10月開催の第74回日本脳神経外科学会には『データと発見』を掲げ、臨む。

私生活では最近、愛犬を喪った。「ラブラドルレトリバー、12歳半でした。食べる、寝る、愛する、生きていく上で大切なことを私に教えてくれました」

そしてインタビューの最後に、今まさに高い山を目指しているであろう寶金教授から、意外にも「山の降り方、タイミング」という言葉が出た。潔い身の振り方の美学。しかし、一つの山を下りても、登るべき山はまた現れるのかもしれない。



北海道大学脳神経外科学教室のロゴマーク。



北海道大学脳神経外科学教室のスタッフと一緒に。2010年、教室のロゴマークを全員で協力して作り上げた（写真左上）。3つのシルバーのリングは、それぞれ「学ぶ」「極める」「伝える」の3つの言葉を表し、色のついたガラス調のリングは、それら3つのコンセプトを束ねる北大脳神経外科という大きな集団を意味している。

Best Doctors in Japan™ 2014-2015 の皆様へ

本誌読者の先生方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

今号（28号）は、昨年度のピアレビュー調査に基づき、あらためて「Best Doctors in Japan 2014-2015」にご選出された先生方にお届けする2号目となります。ご選出のお祝いとともに、ベストドクターズ社についてご案内申し上げますので、ご一読いただけると幸いです。

● ベストドクターズ社とは？

ベストドクターズ社（本社：米国マサチューセッツ州ボストン、<http://www.bestdoctors.com/> [日本語WEBサイト <http://www.bestdoctors.jp/>]）はハーバード大学医学部の教授2名により、「病に苦しむ方々が最良の医療を享受できるように」との理念の下、1989年に創業いたしました。

弊社は現在、本社のある北米をはじめ、中南米、ヨーロッパ、オセアニア各国で事業を展開。日本には2002年に進出し、重篤な疾患で苦しむ方々への「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」のご照会を柱に活動しています。保険やクレジットカード等の付帯や企業の福利厚生サービスとして、また、健康保険組合などの医療保険者を介したサービスとしてお目になさったことがある先生方もいらっしゃるかもしれません。おかげさまで、現在日本では800万人あまりの方々にご利用いただけるまでに成長を遂げました。

● ピアレビュー調査

ベストドクターズ社では、1991年より医師同士による相互評価・ピアレビュー調査を行っています。日本でも1999年から開始しました。この調査は、医師に「ご自身

またはご家族が、ご自身の専門分野である病気に罹患した場合、自分以外の誰の手に治療を委ねるか」という観点から、同一または関連専門分野の他の医師の評価を伺う形で実施されるものです。

現在弊社の日本版医師データベースには、この手法により選び抜かれた各専門分野の「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」が約6,100名入力されています。本誌をお受け取りになられた先生はそのお一人です。こうして選ばれた先生方のご照会を介したセカンドオピニオン受診のお手伝い等が、現在日本での事業の中心となっています。

病を患う方々が必要な情報を見つける「近道」をご提案し、治療のための有力な「道しるべ」となるロードマップを描く——これが、ベストドクターズ社のピアレビュー調査です。

● 日本における総代理店：株式会社法研

ベストドクターズ社の日本進出当初から、株式会社法研（本社：東京都中央区、<http://www.sociohealth.co.jp>）が日本コールセンターの運営や販売代理を担当するパートナー企業となっております。■

ベストドクターズ記念盾

ご選出記念盾へのお問い合わせを多々たまわり、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただき運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念盾は過去のご選出年度（2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】2万4,000円※（送料・税込）【納期】お申し込み後8週間程度
※氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., Ph.D.」等からご選択いただけます。

e-mail : bd-tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



※ 材料費の高騰、平成26年4月1日から実施の消費税増税に伴い、価格改定となりました。



Best Doctors®

Best Doctors, Inc. (ベストドクターズ米国本社)
100 Federal Street, 21st Floor, Boston, MA 02110 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社（Best Doctors, Inc.）は、1989年にハーバード大学所属の2名の臨床医によって設立されました。今日では、世界30カ国、3000万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 株式会社 法研
〒104-8104 東京都中央区銀座1-10-1 Tel.03(3562)8404